

JANU

国立大学協会情報誌
Quarterly Report

vol. 10

September 2008

【特集】日本の文化と伝統を
支える国立大学

創る



◆OPINION

ソニー株式会社 相談役

大賀 典雄 氏

◆連載企画

支部通信

◆今、学生は！

音や映像を通じ

地元弘前の今を伝え続ける

弘前大学

ラジオサークル

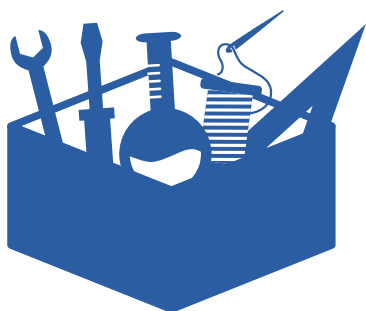


日本の文化と伝統を支える 国立大学

グローバル化がますます浸透する世界の中で、それぞれの国や民族にとって、文化と伝統のアイデンティティ構築は存立の根本的命題であり、教育、特に高等教育の果たす公共的役割がきわめて大きくなっています。そこで年間テーマとして「日本の文化と伝統を支える国立大学」を掲げ、毎号、「学ぶ」「創る」「究める」「伝える」の4つの切り口で、未来につながる文化と伝統のために、保持と革新の両面から、研究・教育・地域貢献を行う国立大学の活動を紹介します。今号の重点テーマは「創る」です。

創る

医療、工芸などさまざまな分野で、日本の先人たちの知恵や技が、最新の知識やテクノロジーとの融合により、さらにその可能性を広げ、世界をリードする先端的な科学技術の創出と、それを担う若い人材の育成に大きな貢献を果たしつつあります。蓄積された知見や技術（縦系）と新たな知見と先端テクノロジー（横系）が凝縮して織り成す〈創る〉世界は、日本を超えて、人類社会の豊かさと幸福の実現に大きく寄与するでしょう。



創

究

伝

学

今号の
重点
切り口



日本の伝統技術を基盤に 先端医療材料を創る

【東京農工大学】

東京農工大学科学博物館では、大学附属の専門博物館という使命から、学術的価値のある資料が多く蒐集されており、その時代において学生の教育上あるいは産業界の指導的役割を果たした資料が多数収蔵されています。代表的な収蔵品としては東京高等蚕糸学校標本室に展示されていた多数の養蚕関係の資料や、繊維・糸・織物・編物などの素材と繊維に関する道具・機械類、また、繊維に関連する技術についても多くの蓄積があります。

これらの技術を基盤に、同館では、朝倉哲郎館長（大学院共生科学技術研究院・教授）および中澤靖元（大学院共生科学技術研究院・助教）を中心に、人工血管の開発を推進しています。

現在、医療現場で用いられている人工血管は、主にポリエステルや、PTFEといったものが使用されており、直径4mm以上の太さでは十分な成果を示しています。しかしながら、直径4mm以下の小口径人工血管に関しては、高い頻度で血栓が生成されてしまい、使用方法が限定されています。この問題が解決されることにより、膝下の末梢動脈血行再建さらには冠状動脈への適用が期待されるため、新たな素材での抗血栓性人工血管の開発が切望されています。

そこで同館では、日本の伝統的な繊維加工法である、「組み」や「編み」等の技術を応用し、またこれらに最新技術を組み合わせることで独自の人工血管を開発しています。

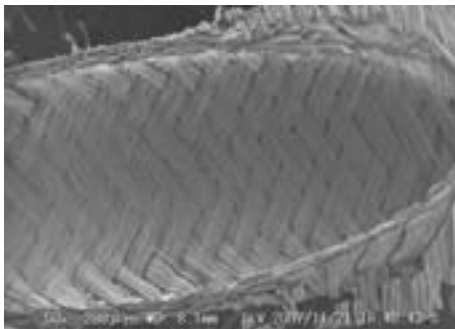
絹製の人工血管は、素材自体の優れた力学物性から、基本的に必要な高い強度を有しています。また、

移植された人工血管は、自己組織の足場材として働き、自己血管の再生を促す、いわゆる「再生医療材料」として機能することが期待されます。

本研究で作製した内径1.5mmの絹製人工血管は、ラットの腹部大動脈に移植し、長期間にわたる評価実験を行いました。その結果1年後も血流は良好で、血栓もなく、血管組織が再生されていることが実証されています。これらの知見を基盤に、現在では、

遺伝子組み換え技術やナノファイバー作製技術なども導入することで、これまでにない高機能人工血管の創製に取り組んでいます。

現代のテクノロジーと先人たちの知恵が凝縮した先端医療材料が、将来、患者さんの命を救う。この大きな目標を達成するため、東京農工大学および同大学科学博物館は、日本の伝統文化と最新技術の融合を新たな創造につなげ、発信していきます。



写真右上：ラット腹部大動脈に移植後1年の絹製人工血管断面
写真左上：内径1.5mm人工血管断面の電子顕微鏡写真
写真右下：伝統的な組みひも機「丸台」（東京農工大学科学博物館蔵）
写真左下：人工血管作製に使用している組みひも作製装置（東京農工大学科学博物館蔵）

陶芸の里佐賀が育む「グローバル」な人材

【佐賀大学】

佐賀は有田・唐津・伊万里などの陶磁器をはじめとする伝統工芸が盛んな土地柄です。佐賀大学は文化教育学部に総合大学としては唯一、単独の美術・工芸課程を擁し、幅広い視野で学んだ学生・卒業生が、教員とともに教育・芸術・産業界に貢献しています。絵画・彫刻・工芸・映像などにおいて優れた作品が生まれています。

窯芸分野においても地域性と伝統を生かし、文化勲章受章者の青木龍山氏（本年4月23日物故）らを客員教授として招くなど、一流の教育機会も持ちながら、用と美、理論と実践を兼ね備えた全国レベルでも高く評価されるクリエイターを育成・輩出しています。昨年度は、国内外第一線の工芸作家が競うコンペティションの最高賞（朝日工芸展・グランプリ）を、本課程の学生が最年少（22歳）で受賞し、全国的な話題となりました。幅広く美術を学びながら修得した高いろくろ技術を生かした成果です。

本年度からは、産学官連携事業として文部科学省科学技術振興調整費に採択された「佐賀大学ひともの作り唐津プロジェクト」の拠点にもなります。5年間、2億5千万円をかけ、科学技術・伝統技術・経営戦略など多面的なカリキュラムによって地域の若手人材を育成します。地域の伝統と多様性を現代社会に打ち出し、国際的にも再評価され得る成果とともに、地域や産業の発展に貢献できる人材養成を目指しています。

また、4年制を設けて高度専門士を養成する佐賀県立有田窯業大学校との連携協力協定によって、相互の利点を生かした体制も整え、より強固な地域貢

献が期待されています。

佐賀は400年以上にわたる陶芸の歴史や、幕末佐賀藩の先進的な工業技術、明治期にわが国の工芸・デザイン教育の礎を築いた納富介次郎などが布石となり、工芸の重要拠点となってきました。現代においても、6人の人間国宝をはじめ、故・森正洋氏や吉岡徳仁氏らの工業デザイナーを輩出する土壌を持つ

ています。佐賀大学が特別教科教員養成課程（美術・工芸）、いわゆる「特美」を擁して戦後日本の美術・工芸教育の一拠点となり、その役割に区切りを迎えた後も健在であるのは必然であると言えます。佐賀発の人材育成は学内や地域に留まらず、伝統と歴史に新たな血を注ぎ、九州・全国・世界へとその通用範囲を広げています。



写真上：朝日工芸展グランプリを受賞した学生作品
写真右下：青木龍山氏（客員教授・故人）を招いた作品講評会
写真左下：戦略的発想能力を持った唐津焼産業人材養成

世界に先駆け普及の第一歩を踏み出した 小型重粒子線照射施設

【群馬大学】

がんによる死亡者数は年々増加し、がん対策はわが国の医療における最重要課題となっています。また、がん治療では、生存率の向上のみでなく、QOL（生活の質）を重視した低侵襲治療法の確立が求められています。このような中で、注目を集めているのが重粒子線による「切らずに治す」がん治療です。群馬大学では、平成18年度にがん治療のための重粒子線照射施設の建設に着手し、平成21年度稼働開始を目指して工事を進めています（図1）。

①重粒子線がん治療の特徴

従来の放射線がん治療では光子線（X線など）が用いられたのに対して、近年、荷電粒子を加速して得られる粒子線による治療法が開発されています。一般に、質量を持つ粒子を加速して得られる放射線を粒子線と呼びますが、特に、ヘリウムの原子核より重いイオンによる粒子線を重粒子線と呼び、重粒子線治療では炭素イオン線を利用します（図2）。重粒子線治療の特徴は、X線に比べて、がん病巣への線量集中性が高いことです（図3）。また、重粒子線のがん細胞殺傷効果はX線の2〜3倍強力です。従って、重粒子線照射は、最も副作用の少ない理想的ながん治療法となります。

②重粒子線がん治療の課題と群馬大学の取組

昭和62年に放射線医学総合研究所（放医研）が、医療用重粒子加速器を世界に先駆けて建造し、重粒子線治療が画期的ながん治療法となることを実証しました。しかし、この装置は120m×65mのスペースと約330億円の建造費を要する巨大なもの

であり、重粒子線治療を国内外に普及させるためには、施設の小型化と低コスト化が必要でした。そこで、放医研の装置の約3分の1程度で、ほぼ同等の治療能力を持つ小型重粒子線治療装置製造のための開発研究が行われ、その成果に基づく技術実証装置が現在群馬大学で建造中のものであります。

群馬大学はわが国の放射線医学分野で先導的な役割を果たしてきました。特に、放射線によるがん治療を担う放射線治療医の育成では、群馬大学の出身者が放射線腫瘍学会認定医の約10%を占めています。また、平成16年度から、日本原子力開発機構高崎量子応用研究所との連携により、21世紀COEプログラム「加速器テクノロジーによる医学・生物学研究」を推進しています。

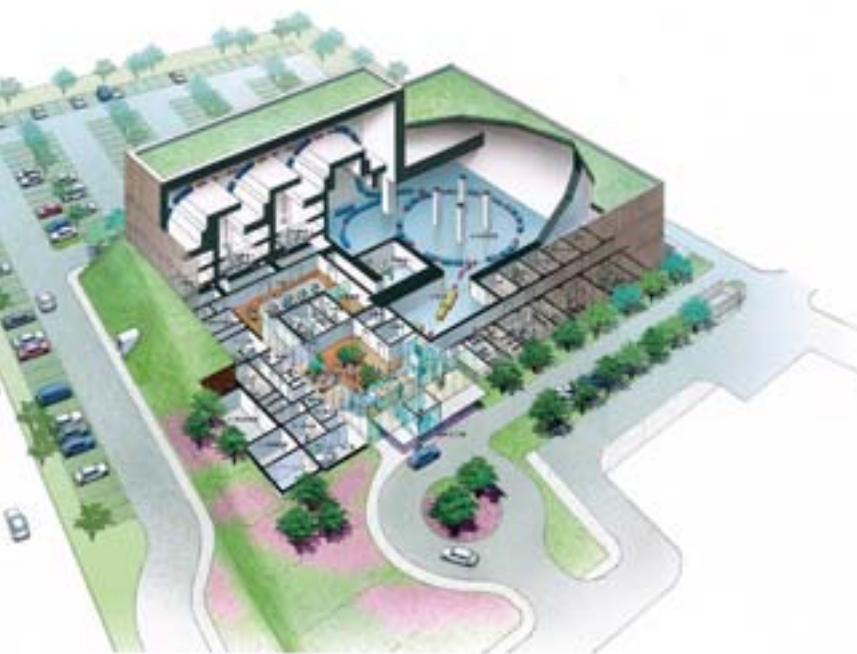


図1 群馬大学に建設中の重粒子線照射施設



図2 重粒子線とは
放射線医学分野では、ヘリウム原子より重い粒子の加速による放射線を慣用的に重粒子線と呼ぶ。

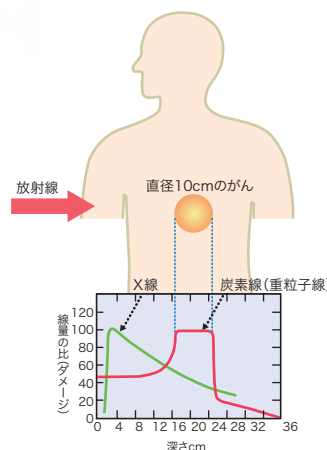


図3 重粒子（炭素）線とX線を体内に照射した場合の線量分布の比較

群馬大学は、これまでの放射線医学における実績を踏まえて、今後更に普及型重粒子線照射施設の機能を最大限に活用することにより、重粒子線医学の基礎から臨床までを包含する国際的な教育・研究・診療拠点の形成を目指しています。

究める

生活の質を高めながら、健やかに生き生きと暮らすための実践的なフィールド調査。

あらゆる領域の最先端技術を駆使して伝統の技を解明し、未来に継承する

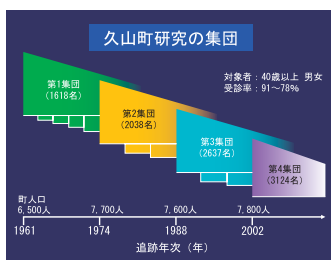
研究開発プロジェクト。人類が初めて体験する長寿社会のフロンティアを（究める）分野は、未知の可能性にあふれています。



疫学から生活習慣病に迫る
—久山町研究—

【九州大学】

九州大学医学部第二内科（現病態機能内科学と環境医学）では、昭和36年から福岡県久山町（人口約8,000人）で生活習慣病の疫学調査を行っています。40歳以上の全住民の8割を検診しており、その後



久山町での集団検診風景

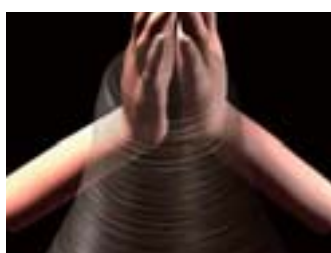
住民を追跡し、脳卒中・虚血性心疾患をはじめとする、心血管病や悪性腫瘍の発症率・死亡率、その原因（危険因子）について調査しています。追跡率は99%以上で、久山町住民の崇高な理解・協力により、死亡者の約80%を剖検して死因を確かめるなど、世界で最も精度の高い生活習慣病の疫学調査であるといえます。

バーチャル陶芸システムプロジェクト

—職人の伝統技能を究める—

【名古屋工業大学】

人から人へと受け継がれてきた職人の伝統技能の保存・伝承がいま求められています。名古屋工業大学では、計測技術、バーチャルリアリティ、ロボット工学を応用し、陶芸を始めとする伝統技術の解明、デジタル化による技能の保存、力触覚を用いた技能伝承方法の開発を進めています。またロボット工学、バーチャルリアリティを利用し、粘土やろくろを用意しなくても遠隔地から陶芸を体験できる高臨場感陶芸システムを開発し、陶芸の普及を図ります。



写真上: モーションキャプチャデータから作成した陶芸バーチャルCGムービー

写真下: シミュレータ実行中の液晶モニター

伝える

日本の暮らしの中に根づいてきた衣食住、そして遊びや風習。大学は、その研究・開発の成果を通じて、何気ない日常にも脈々と流れる伝統や風習を次代に伝えるとともに、新たな地域資産や文化の創出など、地域活性化の推進エンジンとしての役割も期待されています。



栃木県の伝統野菜を守り、後世に伝える

【宇都宮大学】

農学部植物育種学研究室では、地元栃木県に残る伝統野菜の現状を調査するとともに、貴重な遺伝資源として保存を試みています。これら野菜は収量性や病害虫抵抗性などがF1野菜に比べて劣るため、生産者が少なく、かつ高齢化に伴い、作目によって



写真上: 伝統野菜の優良系統選抜風景

写真下: 「宮ねぎ」の地元生産者からの意見聴取風景



写真上下:「ハマ投げ」を今に伝える競技者達

は既に絶滅したものもあります。しかし、食味がよく、地元では無くてはならない食材です。そこで、大学では、種子を収集・保存するとともに、「宮ねぎ」、「新里ねぎ」、「茂木ねぎ」などのネギ類をはじめ、「唐風呂大根」、「水掛菜(野口菜)」、「鹿沼菜」などの試作と優良系統の選抜を行っています。併せて、地域ブランド化の可能性を模索し、地元への還元をはかろうと努めています。

薩摩の伝統遊戯「ハマ投げ」を今に伝える

【鹿屋体育大学】

薩摩の「ハマ投げ」は、2組の競技者(現在1組は5名)が一直線上に相對して縦列になり、「ハマ」(木製の円盤)を「ポット」(木の杖)で相手の陣地に打ち返し合うという打球戯です。

薩摩藩の「郷中教育」で武家の子弟の勇壯な遊戯として行われ、現在も鹿児島に伝わるこの伝統遊戯「ハマ投げ」について、歴史学的・文化人類学的研究を行うとともに、伝統に則りながらも生涯スポーツとして普及・発展させるために用具や競技法等を検討し、大会を開催しています。

学ぶ

日本の食文化、古来の伝統技術をはじめ、日本の歴史、社会、文化について、座学・実学の両面から深くへ学ぶことは、国と民族に関するグローバルな視点を確立する原点です。高等教育の国際化・競争化が加速度的に進む今後、日本の文化と伝統を支えつつ、新たな歴史をつくりだしていくために、大学での「学び」がもつ意味はますます大きくなっています。



日本の食糧基地 北海道道東で 農畜産を学ぶ

【帯広畜産大学】

畜産学部の入学生は全員1年次前期において、「全学農畜産実習」で農畜産に関する実学を学びます。入学してすぐに、家畜改良センター十勝牧場と



写真上:野菜作りの実習風景
写真下:羊の毛刈り実習風景

連携した羊の毛刈りから始まり、圃場での畑作り、野菜作り、豚の飼育・と殺・解体、ソーセイジ作りと酪農・畑作地帯ならではの実習が用意されています。1クラス40人に3人のクラス担任教員がついて、学生も教員も日本の食糧基地が支える日本の食文化を守り・伝えるべく農畜産を学んでいます。

世界の中の奈良——伝統と継承・発信——

【奈良教育大学】

「伝統文化・文化財」、「異文化理解」の二本の柱で奈良の文化について学際的・教科横断的な認識理解をもち、伝統文化を発信できる教育者の育成を目指します。また、大学院留学生に提供する魅力あるプログラムとしての性格を併せ持っており、奈良教育大学の「アジアに重点をおいた国際化」の観点から、すでに協定を結んでいる嶺南大学・インドネシア教育大学・西安外国語大学に加え、アジア諸国の教員養成大学との「アジア教育大学国際交流ネットワーク構想」を実現します。



写真(上):天理市・塚穴山古墳の現地研修
図(下):平成19年度大学院教育改革支援プログラム(3年計画)に採択

ソニー株式会社 相談役

大賀 典雄氏

主張し、
自ら創ることが、
明日への道を
拓きます。

あるべき教師の姿

私の家には父が姉のために買ったオルガンがあつて、私はそれをおもちゃにしていたので、小学校に上がる頃には和音も聴き分け、楽譜も読めるようになっていました。

私が小学生の頃、「修身」という教科がありました。が、小学校1年の1学期の「修身」の成績が「丙」でした。驚いた母が先生に理由を尋ねると、「先生を敬う心がないから」ということでした。音楽の時間には担任の先生がオルガンを弾くのですが、始めから終りまで左手でドソミソだけだったので、1年生の私は「先生、ここからドラファラ」、「ここからシソレソ」と指摘して私が弾いたら、同級生から「大賀の方がうまい」ということになり、それで先生を侮辱したことになったのでしよう。

5年生になると担任の先生が私の才能を見つけてくれて、音楽は「優」の上の「秀」をつけてくれました。ブラスバンドの楽器演奏も熱心に指導してくれましたし、人前で演奏する貴重な経験も積むことができました。

昔の先生は「偉いんだ」ということで大きな顔をしていましたが、それでも、もしやるべきことができなかったら、自分で一所懸命練習して、できるように努力しなければいけません。面子がつぶされたら、できる子に「あなたやつて

みて」と言うのが一番正しいと思います。それくらいの度量を持つことが大切で、そういう教師でないと子どもたちからも尊敬されないでしょうね。

苦情から始まった ソニーとの縁

私がなぜソニーに入ったかというところ、テープレコーダーのクオリティが悪いから、苦情を言うために会社に来たのです。バレーナに鏡が必要のように、これからの音楽家にはテープレコーダーが欠かせない。当時日本でテープレコーダーを作っていたのはこの会社だけだったのですが、その音が悪いので、東京藝術大学の学生だったときに、問題を具体的に指摘して文句を直接言いました。そうしたら、井深さん、盛田さんが「面白いやつだ」と興味を示してくれて、月給を私に出してあげようということになったのです。

私はドイツに留学する直前だったのですが、お金は送ると言われました。その後ドイツから帰国してある日、盛田さんと呼ばれ「君を幹部社員にしたいから、会社に入つて欲しい。昼は会社で働いて、夜は自由に過ごせばいい」と口説かれました。正式に入社したのは29歳のときでした。

しかし実際に働き出してみると気になるどころだらけで、いろいろやっているうちに社長にまでなつて、結局人

生の9割はソニーに勤めたな、という感じです。

主張が仕事を生む

ソニーでは、言いたいことを言うとそれが仕事になりました。最初は業務用のテープレコーダーを作る第二製造部の部長のポストに就きました。ところが実際に仕事を始めてみると、テープレコーダーに限らず、ソニーの製品のインダストリアル・デザインが良くありませんので、盛田さんに話をすると「社内のデザイナーを集めてデザイン室を作るから、責任者になりなさい」ということで、製造部長とデザイン室長の兼務です。

次に広告宣伝が良くないと話をすると「専門部隊を集めますから、宣伝部長をやりなさい」ということになり、3つもの要職を兼務して、大忙しでした。

盛田さんは「だから君を入れたのだから、思うようにやれよ」と言っていました。入社して5年目には取締役になりましたが、そうこうするうちに、音楽家としての活動をする時間は結局なくなっていましたね。

創るときには 自分が燃えてこなきゃダメ

「創る」ということでは、自分が

その話を聞いたときに燃えてこなきゃダメですね。そして燃えてきて「私だったらこうする」というものを出していかないとダメです。初めは言われた通りにやることもあるでしょう。しかしその次はそれから脱却して、自分の流儀を出していくことが必要です。そうすれば、感動がちゃんと受け手に伝わっていくものです。

この7月に軽井沢の大賀ホールで、クリスチャン・ツイメルマンというポーランドのピアノリストが来てリサイタルをしてくれました。彼から「大賀さんには世話になったから、今回は出演料ただでいい」と言われ、公演の一週間くらい前に軽井沢に現れて、遅い日には夜の11時頃までピアノを弾いている。演奏会で私は一音も聴き逃すまいと思って聴いていたのですが、本当に完

成度の高い彼の演奏にすっかり感心しました。誰かに言われてこう弾くとかではなく、自分で今日はこうやろうという意志がはつきりと表現されており、やはり芸術家というのは、完成度の高い仕事をしないとダメですね。

芸術というものは、教わるものではなく、自分で会得するものです。本当に自分がこうではないか、と思うものを模索し、その中から自分で見つけていつて、ああこれだったんだと示さなければいけない。

子どもたちに対しても、環境を用意してあげて、大人が焦らず、子どもを急がせずにじっくりと待ち、できたときに「良くやった。これ待っていたんだ」と思い切り褒めることが大切です。そうすると子どもは「自分で創る喜び」を知り、どんどん伸びていきます。



撮影：三好英輔

大学のリーダーは フィロソフィーを持って

最近大学を外から見ているだけですが、国立大学について言えば、特徴がどんどんなくなってきたという話を聞きます。昔は「この大学に行く」という教育を受けることができた」ということがあったのですが、今はどこに行っても同じで面白くないと言っていますね。

そうだとすると、一番大切なのは、大学のリーダーがより高い理想を持ち、次の世代に何を残していくのかを年々考えて、一所懸命に努力することだと思います。責任者が自分のフィロソフィーを持って、こちらに行くんだと旗を振らないといけない。リーダーシップはとても大事なことです。学長や役員が動かないと、その次の人たちが動いても空回りすることになってしまいます。

ブランドを磨き上げる

会社も大学も、実際には世の中の人からは中は見えませんが、広告宣伝や広報を通して見るわけですから、外部へ向けたコミュニケーション活動はとても大事です。ブランドのロゴにしても、私達くらい変えた会社はないと思います。初めの頃の「SONY」のロゴは本当にちゃんなもので、それを私が第

8バージョンまで変えて今に至っています。普通の字体をただ並べると、Sが小さく、Yが大きく見えてしまう。それを視覚的に同じ大きさに見せるにはどうすればいいか。それをやるのに大変苦労しました。

大学は会社とは異なるところもあるでしょうが、ロゴにしても、スローガンのような言葉にしても、自分の大学の上に何を掲げるかは非常に大切です。ブランドに関わるものは、じっくりと時間をかけて検討し、置いておくべきだと思います。

役立つ人を育てれば、 大学の評価は上がる

国立大学の広報という点で言えば、一番大切なことは、本当に役立つ人を育てることですね。卒業してきた人が、人間的な魅力も豊かで、かつやっつけていること自体が素晴らしい。そういう立派な人を育て上げれば、その大学のひとつの財産になるわけです。大学に関わる皆さんが、一所懸命がんばって優秀な人を輩出させれば、その大学は自然と一流の大学になっていきます。広報活動においても、この点を意識して計画を立て、世の中での大学の評価を高めていくことが必要だと思います。

若者は毎年、自分の将来について書いてみよう

大学生になれば、自分で考える能力もありますし、自分が将来どうしたいのかということを実際に考えるでしょう。そこでお奨めしたいのは、自分の将来についての考えを、毎年文章に書いてみるということです。年末でも新年でもいいでしょう。今年はどう書いた。翌

年になると、あれではいけなくなったからこうしようと書き直す。そのように繰り返し書くことがとても勉強になります。

自分の成長過程を振り返ることができますし、何がまだ自分には足りないのか、はつきりと気づく。明日への課題も見えてくる。若い人には、是非そういうことをやって頂きたいと思っています。



大賀 典雄(おおが のりお)

1953年 東京藝術大学音楽学部卒
1957年 ドイツベルリン国立芸術大学音楽学部卒
1964年 ソニー株式会社取締役
1968年 CBS・ソニーレコード社長
1982年 ソニー株式会社代表取締役社長
1995年 ソニー株式会社代表取締役会長
1999年 東京フィルハーモニー交響楽団会長・理事長
2000年 ソニー株式会社取締役会議長
2003年 ソニー株式会社名誉会長
2004年 東京文化会館館長
2006年 ソニー株式会社相談役

支部通信

全国の国立大学の新しい風をお届けします。



旭川医科大学

「復職・子育て・介護支援センター（二輪草センター）」を開設

旭川医科大学は、文部科学省「地域医療等社会的ニーズに対応した質の高い医療人養成推進プログラム」採択により、復職・子育て・介護支援センター（二輪草センター）を平成19年10月に開設しました。

センターでは、出産後仕事の継続を断念する医師や看護師等が少しでも減るように、また、今まで培ってきた職歴、技術を途絶えさせないために、子どもの急病などで早退する場合、代理の勤務者に業務を引き継ぐまでの間、子どもを預けることができる病児一時預かり

室システムや、あらかじめ登録している経験豊富なバックアップナース（育児支援担当者）に代理の勤務をしてもらうことができるバックアップナースシステムを運用し、病院職員をサポートしています。また、センターでは、院内24時間保育所や小児科とも連携し育児の支援を行うとともに、子育て支援セミナーやキッズサマースクール等、様々な取り組みを行い、医療人の職場への定着を図っています。



二輪草センターのロゴマーク



写真上：旭川医科大学 大学の森 みどりの保育園
写真下：子育て支援セミナー

秋田大学

秋田文化の鉱脈を掘る

秋田には広大な自然美と伝統文化が育んだ超一級の文化資源が多くあります。江戸期の秋田漢詩文数千編はその一例です。この数量は江戸期の日本漢詩文全体の二割強を占めていると見込まれていますが、その存在はあまり知られていません。秋田文化の「強み」と「弱み」の一つはここにあります。

本取組は、この問題を克服するために「秋田の優れた文化資産を顕彰し伝達する授業実践」を理念とし、「秋田漢詩文」等を通じて十年余に涉って展開してきました。簡潔達意の

漢詩文を訳読させることを通じて学生教育を行った成果は、「江戸期の秋田漢詩文訳読」第一集、第三集（私家版）に結実しています。各冊百頁前後七百部印刷し、学生・教職員・県下の全中高・図書館等に無償配布してきました。訳読成果の一部が国の名勝指定や県の有形文化財指定を受けることに「役買」たり、事業改善の年度計画に組み込まれていることなどは本取組を推進する上で大きな励みとなっています。



原典史料調査の様子

政策研究大学院大学

政策研究大学院大学創立10周年

政策研究大学院大学は、平成9年10月に99番目の国立大学として創設され、平成19年10月に創設10周年を迎えました。また、平成19年は、同大学の前身である埼玉大学大学院政策研究科(GSPS)が昭和52年に設置されてから30年目といった大学にとつての節目の年であり、10周年を記念して、様々な事業を企画しています。

平成20年1月31日には、記念事業の一環として、アジアの有力なナショナルリーダーである元タイ王国首相のアナン・パンヤラチュン氏

による特別講演会「21世紀のアジアにおける日本の役割」を開催するとともに、長年に渡るタイ王国における政策体系の高度化・国際社会の発展に対する功績を顕彰し、アナン元首相に対し、名誉学位を贈呈しました。

また、政策研究大学院大学創設の経緯と背景をまとめた「政策研究の地平へ—GRIPSの挑戦」(著者・吉村融理事、前学長)を刊行しました。

平成20年9月29日に、記念式典と祝賀会を開催しました。



八田学長から名誉学位記を授与されるアナン・パンヤラチュン氏

新潟大学

ダブルホーム制による、いきいき学生支援

新潟大学では、学生が様々な場面で困難な問題に直面しても適切に対処できるように、「ダブルホーム制」による、いきいき学生支援」という総合大学ならではの活動に昨年度から取り組んでいます。

入学から卒業まで学生が学ぶ拠点である学部・学科を第一のホームに例えると、新しい第二のホームは、文系・理系・医歯系の学生が集まる総合大学の特性を生かし、学年・領域を越えて構成されます。第二のホームでは、学生が将来専門家として提供する様々なサービスに

ついて、受け手である生活者の視点に立つて地域連携に取り組めます。自分を生活者の立場に映すことや多様な価値観の人たちと話すことにより、将来学生が直面する困難な課題に適切に対応できる力が養われます。このことが、学生の生活をいきいきとしたものに変えて、悩みに陥ることを未然に防ぐ予防的環境とすることを目指しています。地域が抱える問題を学びながら、地域の隠れた資源を発掘することによって、地域の課題解決に貢献したり、新たな地域興しの活動に発展する可能性もあります。

本年度の目玉として新潟県阿賀町を対象地域とした「合同ミニ学術調査隊」を結成し、6月からはフィールドワークを開始しており、地元阿賀町からも、その活動に熱い期待が寄せられています。



阿賀町に入って活動する合同ミニ学術調査隊

愛知教育大学

科学・ものづくりフェスタ@愛教大

平成19年11月10日に、特色GP「科学教育出前授業等による学生自立支援事業」の一環として、「第1回科学・ものづくりフェスタ@愛教大」を愛知教育大学において開催しました。この特色GPは、同大学が教員養成を主軸とする教養教育を重視する大学として、算数・数学や理科の得意な理系教員のみならず、広く文系の学生もこの取り組みに参加し、算数・数学や理科好きな教員を育てることを目標としています。日頃から取り組んでいる訪問科学実験、ものづくり教室や天文教育講座など

に加え、同大学教員・学生による自然科学分野での実験・制作・体験学習や展示、科学の普及やものづくりに取り組んでいる各団体・個人、協賛団体による実験・制作など36の取り組みを行いました。

当日は好天にも恵まれ、開場と同時に小学生を中心に多くの家族連れが訪れ、約800名の来場者がありました。今回の「第2回科学・ものづくりフェスタ@愛教大」は、平成20年11月8日に開催します。



写真上：ナノテクを体験—金ナノ粒子の合成
写真下：ホーバークラフト体験



京都大学

京大VBLの京都型エコカー (Kyoto-Car)開発の取り組み

京都大学ベンチャー・ビジネス・ラボラトリー(以下京大VBLと略)では、地球環境に優しく、また先端科学技術と伝統文化・芸術が融合した京都型エコカー「京都電気自動車(Kyoto-Car)」開発の取り組みを行っています。京大VBLが核となり、自治体との連携およびベンチャー・民間企業等の協力を得て、ナノテクやロボットテクノロジー等の最先端技術を基盤に、耐候性の高い漆(うるし)や竹などの自然素材、さらに京友禅など自然と共生してきた日本の伝統技術・芸術を融合した、「自

然と人間の和の車」を開発し、国内外での早期普及を図るため、京都議定書の発祥の地でもある京都から各種提言を行っています。今夏、1/10サイズのコンセプトカー(自走可能な京漆塗りの車や京友禅紋様を描いた車)を完成させ、平成20年6月12日には世界遺産でもある清水寺でプレス発表を行い、また京都でのG8サミット外相会合時には海外メディアにも公開展示した。1/1実車モデル製作と共に先端技術と伝統文化の融合を図る本取り組みは国内外で注目を集めています。



(参照)

<http://www.kyoto-car.jp/>
<http://www.vbl.kyoto-u.ac.jp/Projects/Kyoto-Car/>

高知大学

指定管理者制度による 公立医療機関の運営

高知大学は、地域医療に通じた医師の育成を効果的に行うこと等を目的として国立大学法人初の公立医療機関の指定管理者として、「高知市土佐山へき地診療所」を平成20年7月1日から平成24年3月31日まで運営することになり、同年6月30日に高知市役所において、協定書の調印式を行いました。

同へき地診療所は、高知市北部の山間にあつた旧土佐山村が昭和38年に開設した診療所で、高知市の「へき地診療所における安定した医師確保」への思いと、高知大学医学部の「附

属病院では体験できない初期治療・地域医療の教育を行える医療環境で、地域密着による医師の育成を図りたい」との思いが一致し、誕生したものです。

高知大学医学部では寄附講座「家庭医療学講座」を中心として、診療所での実習を地域医療医の育成に活用し、理念である地域社会に貢献しうる人材育成を積極的に推進しています。



高知市土佐山へき地診療所概観

大分大学

学生が別府のまちづくりを提案

平成20年6月1日、大分大学工学部福祉環境工学科建築コースの学生が、日本屈指の泉都である別府市の魅力をさらに引き出そうと、地元住民の方を対象に『路地』から考える、少し先のまちの姿「別府中心市街地・路地空間の魅力」と題した発表会を開催しました。

この発表会は、「建築設計演習」の一環として行われ、老舗の温泉として有名な竹瓦温泉2階の元町公民館を会場に、昨年から市街地を調査してきた同コースの学生約20名が、グループごとに観光客向けゲストハウスや、地元

住民と観光客の交流スペースなど5テーマの提案をしました。

参加した地元住民約30名は、学生が課題で作った模型や写真の展示を興味深そうに眺め、昔ながらの路地の風情をいかに残すか等について、学生たちと積極的に意見を交わし、学生もまた地域の方から貴重な情報を得ました。

同コースでは、別府市と連携して、湯けむりの保全と湯のまち情緒をいかした都市計画に取り組んでおり、学生らしい柔軟な発想に溢



展示の説明をする学生

れる今回の発表会は、「湯のまち別府」の景観づくりに新鮮な息吹を吹き込むものとなりました。

今、学生は！

音や映像を通じ

地元弘前の今を伝え続ける

弘前大学

弘大ラジオ サークル

弘前大学人文学部2年

部長 近藤 志織さん

弘前大学人文学部3年

前部長 黒滝 春香さん

毎月第三土曜日の夜城下町・弘前のラジオからは、はつらつとした学生達の声があふれてきます。平成17年にスタートした「弘大ラジオ」は、弘大ラジオサークルが番組制作すべてを担当し、市民からの人気を集めています。彼らは、ラジオで培った力を映像にも生かしNHK全国大学放送コンテストで文部科学大臣奨励賞を受賞。地元だけでなく全国へと活躍の幅を拡げています。

ラジオ番組の制作では 学生の視点を大切に

——サークル設立のきっかけは

近藤 弘大ラジオサークルは、ラジオ好きな学生が集まり、地元のコミュニティFM局「FMアップルウェーブ」で番組を作りたいということで平成17年に結成されました。私の2年上の先輩方が、ア

ップルウェーブの募集記事を新聞で読み、放送局に交渉してその年の11月から番組をスタートさせています。現在メンバーは28人ですが、私も含めてみなラジオ番組を作りたいということで集まってきました。

——現在の主な活動は

近藤 毎月第三土曜日の夕方7時から

9時まで放送される「弘大ラジオ」を制作するのがメインです。番組は1ヶ月に1度ですが、毎週水曜日にコーナー担当決めや内容についての会議を行っています。内容については、学生ならではの視点を大切にしています。それが一番現れているのが、メンバーが身近な場所から政治・経済まで、さまざまなジャンルについての本音を語る「弘大生の主張」というコーナーです。また青森県内の様々な場所を訪ねる「ローカル線の旅」というコーナーも人気があり、放送2週間前から収録に出かけています。屋外での収録のため、毎回録音を担当するミキサーが大変です。弘前に住んでいても意外と知らないことも多



く、そうした地域に出かけ地元の方と直にふれあえるのが、収録で一番楽しい部分です。しかし、マイクを持って収録となるとどうしても警戒されてしまったり、相手の方も普段通りにはしゃべれなくなってしまう。そこで、笑顔で話しかけ、緊張感をほぐしながら話を引き出せるようにしています。

ねぶたの魅力伝えるため 映像の編集に力を入れた

——NHK放送コンテストで文部科学大臣奨励賞を受賞した

「夜空に舞う〜じよっぱり大太鼓に
かける想い」制作のきっかけは

近藤 このテレビドキュメンタリー作品については、前部長の黒滝春香さんが中心となつて制作しました。

黒滝 普段ラジオを活動のメインとしているので、コンテストではそれとは違ったことをしたいと、映像制作経験のあるメンバーが集まり制作しました。弘前ねぶた祭りで先頭を切る「じよっぱり大太鼓」は、弘前の人なら誰でも知っているものですが、実際にどんな方が叩いているのかわからないのかとなると、あまり知られていません。そんな中、じよっぱり大太鼓を叩く人の中に女性がいると知り、ねぶた期間中だけでなく、練習風景なども含めて密着してカメラを回しました。撮影中は、彼女のじよっぱり大太鼓やねぶたにかける想いに圧倒され、完成し

た映像でそうした姿が伝えられればと、編集には力を入れました。コンテスト応募作品には時間制限がありそこに収めるのが大変で、応募直前は徹夜続きになってしまいました。

近藤 放送コンテストに参加したのは昨年が初めてで、メンバー誰もが賞をとれるとは思っていませんでした。「NHKスペシャルみたいだね」とほめてくれた他大学の方もいたのですが、私たちが優れていたというより、じょうばり大太鼓が素晴らしいことが受賞につながったのだと思います。

——今後の目標は

近藤 まず、毎月のラジオ番組を充実させることは当然なのですが、今年もNHK放送コンテストに応募しますので、今はその準備にもとりかかっています。実は、昨年のコンテストではラジオドラマ、ラジオCMといった部門にも応募したのですが落選してしまいました。今年は、「本業」ともいえるラジオでも賞を目指したいと思います。

個人的には、在学中はもちろん大学を卒業してからアナウンサーや記者という形で弘前のことを伝える活動ができればと考えています。私は十和田市出身なのですが、弘前で感じたのが街の人々の暖かさです。道を聞くと笑顔で教えてくれる、知らない人から親切にしてくれる、そうした弘前が持つ暖かさを、これからも伝え続けていければと思います。

編集後記

今号の特集は4つの切り口のうちの「創る」に重点を置いて構成いたしました。たが、いかがでしょうか？国立大学は、先端・創造的な基礎・応用研究の推進、充実した学部・大学院教育の実施、地域・産業連携等を一体的に行い、高等教育システムの基幹的な役割を果たしております。スペースの関係で、多面的

国立大学の目指すべき方向——自主行動の指針① 指針1 公共性の再確認と社会への貢献の明確化

高等教育は、学術研究、教育及び地域貢献を通じて、我が国及び人類社会

はない。

の持続的発展に貢献する公共的な役割を持ち、政府が国立大学を設置・維持するのは、この公共性由来している。国立大学の法人化は、大学が附属機関として政府の指示によるのではなく、自らの判断と責任において、直接国民全体の期待と負託に応える責務を課したものであり、公共的な役割を放棄して財政的利益を追求するためのものでは

はない。高等教育のこの使命を果たすために、国立大学は、次の点を確認し、努力する。

- 1-1 社会全体に貢献する公共的存在であることを明確にする
- 1-2 高等教育の機会の保障や地域社会への貢献など公共的価値を実現する
- 1-3 教育システム全体の均衡ある発展に寄与する

表紙の書

【創】



東京藝術大学 学長
宮田 亮平 筆

「創」という文字のものゝ形は、「勦」と表現します。

この形は鋳型のわく(井)を力ではずして中の器を取り出すことを表わしています。「つくる・はじめる」などの意味を持ち、創意・創作・創造など芸術の身近な文字として私たちの生活の中に生きています。

※ 弘大ラジオサークル

平成17年11月に設立された、ラジオ番組制作サークル。地元コミュニティFM局「FMアップルウェーブ」でレギュラー番組「弘大ラジオ」を担当するほか、昨年のNHK大学放送コンテストでテレビドキュメンタリー作品「夜空に舞う〜じょうばり大太鼓にかける想い」が大会全体の最優秀作品に与えられる文部科学大臣奨励賞を受賞する。





社団法人 国立大学協会
The Japan Association of National Universities
<http://www.janu.jp>